

業界に一石投じる ハートフルな運送会社



「運送業は私の天職。生まれ変わっても、この仕事一択です(笑)」と三宅さん。挑戦の喜びをかみ締める日々だ

【和歌山市】思いの丈をびっしりと手書きした3枚の用紙がある。14年前、三宅友理子さん(53)＝副白ゆり長＝が「株式会社 運び屋商会」を起業する際に練り上げた事業構想だ。以来、「一つの会社の中で、年代や性別に関係なく助け合い、支え合い、つながりの持てる職場環境をつくってきたい」と、掲げた理想を着実に実現させてきた。今、業界に一石を投じる会社として注目を集めている。

**働** き方改革関連法が適用された2024年、長時間労働が是正される一方で、膨れ上がる物流需要に際し、輸送能力の低下とコスト増など、数々の難題が業界全体に突き付けられている。そんななか、三宅さんは会社設立当初から、ドライバーフアーストを掲げてきた。「私には単に『モノ』を運ぶのではなく、人々の笑顔や未来を左右する商品。多くの人の思いが託された品。新たな人生のスタートに進むアイテム、一つの積み荷には、いろいろな『物語』があると考えています」。安心して運転・配送に専念できる労働環境があって、物流の安定は成り立つ。

# 心を運び 感謝届ける

そのために、三宅さんは気を配る。例えば、子育て世代のドライバークラスへの配慮。ルート配送のため、いったん乗車すれば、早速退社するというわけにはいかない。そのため、何かあれば、三宅さんやパパやママの代わりにお迎えや面倒

を見ることもある。定年しても、増えた運送技術・経験を生かせる業務に移れるなど、安心して働ける環境を用意している。

「ドライバーは単なる運び屋ではなく、お客さまに笑顔をお届けするもの」です。大型トラックやタンク車、二つの重機物の輸送をはじめ、ユニッドを使用した建設機器の輸送、機動力のある軽配送、介護タクシーまで、請け負う仕事は幅広い。差し出す名刺は、コテコテのブラックカラー。「外見はめっちゃブラックやけど、中身はめちゃくちゃホワイトなんです(笑)」。商談での三宅さんは、ちゃめっぴりたふぶり。

**運** 送業の家に生まれた。父・正毅さん(81)「壮年部員」、母・香子さん(74)「女性部員」。

「この10年、営業活動をしたことではない。全て紹介で新事業の話が持ち込まれてきた。それは着実な仕事ぶり、築き上げた、三宅さんへの信頼の証しでもある」。

**独** 立から3カ月、仕事はほぼゼロ。だが、情熱だけはあふれていた。三宅さんは仲間たちと、ドライバーが働きやすい労働環境と安定した経営が両立できる会社像について議論を重ねた。同業者からは「なんも運んでへんの」、何が「運び屋商会」と笑われた。それでも三宅さんは、自ら大型トラックやユニック車などの複数の免許を取り、折伏に待った。懸命に奮闘し、折伏に挑戦し続けた。小さな仕事も大切に。半年後、大口の建築材の運送の仕事が舞い込む。これ足がかりとなり、次々と新たな事業展開を果たしていった。「なんも運んでへん運送業に携わる喜びを、配送先で実感することも多い」。

が、懸命に働く背中を見て、三宅さんは育った。父にひびくついで、大型トラックに同乗するのを楽しみだした。笑顔があふれていた自宅は、4軒を間借りした長屋。三宅さんたちきょうだいは、左から1階、2階、3階、4階と呼んだ。「3階」の仏間は、連日、仏法対話に訪れる人であふれていた。誇りも高く胸を張る庶民の生き方が、三宅さんにも根付いた。21歳で大手自衛車メーカーに就職。その後は、忙しさから学生生活から離れた。27歳で結婚。3人の子どもの間に生まれ、ささやかな幸せをかみ締める日々だった。32歳の時、人生が急転した。離

この夏にも、梅農家の集荷作業で教えられた。山あいで親戚に頼む人たちが、運んでくれる。あながたがいくか、丹精込めた梅を全国に届けられるの」と感謝された。心を運び、感謝が届ける。それが、運送業の社会的使命だと自覚している。今では45人従業員が、誠心誠意で業務に当たっている。大阪・関西万博のパビリオンの建設資材輸送にも携わった。

「会社が成長してきたのも、みんなが家族のよう」に仲良く、力を合わせてきたからと、三宅さんは胸を張る。今月は、1つ1つうれい出来事があった。三宅さんの日頃の振る舞いのおかげで、5年前に創業者の一人に入会した事務員が自身の母親を、2年前に入会したドライバー



が友人を、それぞれ入会に導くことができた。上下の隔たりなく、一丸となって地域・社会に貢献できる人材に、新時代のモデルケース企業の挑戦は、始まった(カス)。

婚を機に、三宅さんは家業を手伝うことになった。幼稚園に一番乗りで子どもを預けると、夜遅くまで配車業務に追われた。両親が幼い子どもたちの面倒を見てくれた。多忙のゆえ、自分の時間などなかったが、世の経済活動を支える誇りを感じた。学会活動に励むようになった。三宅さんの心の眼は、大きく開かれていく。

ドライバーの視点から、業界の問題点を感じるように。当時女性ドライバーが少ない時代、加えて長時間労働や、他の業種と比べてドライバーの「地位」が低く、人手不足が顕在化し始めていた。三宅さんは、ある思いを駆り立てていく。年齢、性別を問わず、ドライバーが安心して働ける会社をつくる、物流の世界に一石を投じたい。

それは、「目の前の一人を大切に」。一人の不幸の上にも自分の幸福を築くことではない。との池田先生の思想を具現化する挑戦でもあった。

三宅さんの思いを両親も受け止めてくれた。「社会のために」という思いに立った策の決断を、陰ながら応援する思いでした。2011年(平成23年)、39歳で三宅さんは志を共にするドライバーたちと、「運び屋商会」を設立した。

Be a Change Builder. Changemakerとよばれる、自ら変化を生み出し、社会を大きく変えていく人たちがいる。安藤ハザマは土木・建築の「築く」力で、人々の暮らしや社会の発展を支えている。社会も、価値観も、働き方も、気づけばすべてが変わっていく時代に、求められるのは、自ら変化を生み出せる力。未来をよりよくするために。人と技術で、あらたな課題へ挑み続け、まだない答えを生み出し続ける。わたしたちは、建設から社会を変えていく。さあ、ChangeBuilderになろう。